



Title	第一部 通史 . 第一編 札幌農学校から北海道大学へ（一八七二～一九六八年） . 第一章 札幌農学校の設置
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 5-35
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/28130">http://hdl.handle.net/2115/28130</a>
Type	bulletin (article)
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_1(1)-5.pdf



[Instructions for use](#)

# 第一章 札幌農学校の設置

## 第一節 前史

### 一 開拓使の設置

開拓使の設置と開拓技術の導入 一八六九（明治二）年五月（以下、明治五年まで陰暦）、函館五稜郭に拠っていた榎本武揚ら旧幕府軍の降伏により、戊辰戦争は終結した。当時の蝦夷地（同年八月十五日に北海道と改称）の人口は五万八〇〇〇人ほどであったが、「北門の鎖鑰（さくご）を固め其宝库を開拓する」ことは、喫緊の課題であった。同年七月に政府の官制改革がなされ、このとき開拓使も設置された。初代長官には鍋島直正（閑叟、前肥前藩主）が、二代長官には東久世通禧（みちとみ）が就任したが、その本格的始動は、兵部大丞であった黒田清隆が開拓次官となった翌七年五月からである。

黒田は次官就任後、樺太・北海道を自ら視察し、その方針を固めた。すなわち開拓事業における外国技術の導入、その指導にあたる外国人の雇い入れ、技術習得のための海外留学生派遣などである。一八七一年、彼はアメリカ合衆国へ出張し、同国農務長官ホーレス・ケプロン（Horace Capron）を開拓使顧問に雇い入れた。その後、開拓使が雇い入れた外国人技術者は総数八〇名前後にのぼった。いわゆる御雇外国人の半数以上がイギリス人であるが、開拓使に雇われた外国人技術者の過半数はアメリカ人で占められた。北海道開拓はアメリカを範として進められたのである。

留学生の派遣 外国人の雇入れと並行して、一八七一年から翌年にかけて開拓使留学生も次々に派遣され、その数三三名に及ぶ。この二年間に日本政府の派遣した官費留学生は一五五名であるから、ほぼ五分の一にあたる。三名の中には山川健次郎（のち東京・九州・京都帝国大学総長）、新島七五三太（襄）らがあり、津田梅（梅子）ら女子五名が含まれていた。派遣時の留学生の年齢は、最年少七歳の津田から三三歳の新島と幅があるが、一〇代が二〇名（津田を含む）、一一〇代が一一名で、いずれにしても若い。鹿児島・山口の出身者が多く、次いで東京・静岡などの旧幕臣・旧佐幕藩士族の子弟が多い。その派遣先はアメリカ二四名（うち女子五名）、ロシア六名、フランス三名で、専攻学科は農学一六名、鉱山学八名、工学二名、女子の五名は普通学である（不明二名）。

その後、政府の海外留学生整理の方針により、一八七三年十二月女子留学生を除く全員に帰国命令が出され、留学生派遣による人材養成はここに中断した。彼らのうち北海道開拓に直接関わった者は少なかったが、日本の近代化が図られる中、他の分野で活躍した者もまた多い。

## 二 開拓使仮学校

仮学校の設置と生徒募集 海外に留学生を派遣する一方、開拓に従事する人材の国内での養成も目論まれ、一八七二年一月、開拓使に「仮学校」を設置することが認められた。また、病院・医学校、露学校の設置が認められ、さらに仮学校の設置後まもなく、同校に仏学課と女学校が併置されている。こうして開拓使は英仏露の三カ国語と、農学・鉱学・器械学・医学などを教授する学校および女学校を発足させることとなった。

仮学校の開校 一八七二年四月十五日、開拓使仮学校は東京芝増上寺本坊に開校した。一九カ条より成る「開拓使仮学校規則」の第一条に、「此学校ノ儀八北海道開拓之為メ二設クルヲ以テ、是レヲ彼地ノ首府タル薩字魯<sup>さうぼろ</sup>二建テ、彼地ニ住スル者ヲシテ専ラ智識ヲ増シオ芸ヲ進メ、是レヲ以テ開拓之資業トナサシメントノ本旨タリ。然レトモ其

業日浅ク事ニ就ク序有リテ彼地ニ学校ヲ建ルノ暇アラサルヲ以テ先仮学校ヲ東京ニ設ク。故ニ此学校ニ入ンコトヲ願フ者八成業ノ上北地開拓ニ従事スルヲ以テ主意ト為ス者ニアラサレバ許容有之間これあるまじし舖候事」とある。学科は普通学と専門学の二つがあり、前者は普通学第一および第二に、後者は第一より第四に分けられる。普通学第一で英語学・漢学・算術・窮理学・歴史などの基礎一般科目を修学し、そのうち第二で含密学・器械学・本草学などの基礎専門科目を学ぶ。普通学修了後、生徒は専門四科のうち一科を選ぶ。第一では含密学・器械学など、第二では鉱山学・地質学など、第三では建築学・測量学など、第四では含密学・本草学及び禽獣学・農学などの専門科目を修める。生徒定員は官費生・私費生各五〇名、成業後官費生は一〇年間、私費生は五年間北海道開拓に従事することが義務づけられ、入学時に義務履行の「請書」を提出することになっていた。

一八七二年六月、仮学校内に仏学課が設置され、七月に入学試験を経て官費生一〇名、私費生七名が選抜された（定員各一〇名）。彼らは仏学生徒と呼ばれ、これに伴い従来の生徒は英学生徒と称されるようになった。学科内容は語学を除いて共通である。

組織・教職員・生徒 仮学校を管轄したのは開拓使東京出張所である。当時開拓使は、札幌に本庁、函館・根室に支庁、東京に出張所を置いていた。東京出張所は仮学校と同じく芝増上寺内にあり、開拓次官黒田清隆（一八七四年八月より長官）はここで政務に当たっていた。出張所とは言いながら実質的な中枢機関であった。仮学校の校務は出張所内の学校掛あるいは仮学校掛と称する人々により運営されていた。

開校当時の仮学校職員は英学方・漢学方・数学方（算術方）・画学方・習字方・事務掛・生徒取締・写字・書籍掛・門番・玄関番・舎密現術掛などに分けられ、それぞれ二、三名から数名が配された（後に仏学方・女学校掛・医官・土人教育掛・舎監などが置かれた）。初期の職員の異動は激しいが、四〇〜五〇名程度が詰めていたようである。

一八七二年七月の時間割によれば、授業科目は英仏学・算学・幾何学・高等数学・画学・和読書・漢作文・和漢習学・和漢歴史となつてゐる。これらは「普通学第一」に相当するもので、「普通学第二」及び専門四科はまだ開設されていない。教職員の職務を規定する職制は定められておらず、校長すら置かれていなかったが、仮学校職員中最も官等の高かつた荒井郁之助が事実上その責を果たしていた。

生徒には官費生・私費生・附属生徒の三種があつた。官費生は衣食住はもちろん、学業及び生活に関する一切のものが支給された。官費生一人に要する経費は年一〇〇円以上である。私費生は毎月五円を学校に納めたが（一八七二年七月までは八円）、その他の扱いは官費生同様であつたようである。附属生徒とは、規則には何も規定されていないが、身分は開拓使下級官吏でありながら仮学校入学を命ぜられた者のことで、いったん海外留学を命ぜられながら取りやめとなつた者たちもいた。生徒の異動も職員同様激しく、中途退学する者がかなりいた。官費生に欠員が生じた時は私費生から補充しており、常時一〇〇名程度の生徒がいたと推定される。

一八七二年八月に学制が制定された後、文部省は官費生制度の廃止を決定したが、開拓使は仮学校官費生の存続を主張し認められた。仮学校は文部行政の埒外の学校であり、「職人」（開拓技術者）を養成し、北海道開拓にきわめて実践的に関わる特殊な学校であることが改めて確認されたのである。

仮学校の再開校 開校してからほぼ一年を経た一八七三年三月十四日、学校運営が不安定な状況で、仮学校はいったん閉校し生徒全員に退学が命ぜられた（後述の地質測量生徒・電信生徒・女生徒は除く）。三月十七日、調所広文・柳田友卿・森源三・井川<sup>きよし</sup>冽の四名が仮学校改正掛を命ぜられ、彼らにより「綱領」「職制」「校務定則」「生徒規則」「罰目」「校門規則」「男女生徒入校証書雛形」よりなる「開拓使仮学校則例」が定められた。開拓に必要な人材を養成するという仮学校の基本的性格に変更はないが、二年後に専門科を開設し学校を札幌に移転することが定められた。成業後に開拓に従事すべき年限は五年間に短縮されたが、その一方では北海道に籍を移すことが義務

づけられた。「生徒規則」「校門規則」「罰目」などにより生徒の管理強化が図られている。さらに校則違反や個人的理由による退学の場合は、在学中の経費を弁済することが「入校証書」により義務づけられた。また「職制」により置かれることになった教職員は、校長・教授・助教・級長・生徒より選出）・医官・事務・校内取締・玄閑詰・門候である。なお校長格であつた荒井郁之助は、この時、仮学校を離れている。

学校が再び開校したのは一八七三年四月二十一日であり、二十二日には授業も再開された。それに先立つて仮学校改正掛は廃止され、四月十九日に調所広丈は仮学校校長心得を、柳田・森・井川は仮学校事務掛を命ぜられている。再開校の際に教員・生徒共にかなり多くが整理された。かつての生徒のうち、再入学を志願し、体格及び学業検査に合格した者は三六名で、生徒数は大幅に減少した。また全員が官費生となり私費生は廃止された。

なお、右のような仮学校の改正に合わせてか、一八七三年六月には仏学課が廃止された。在籍していた仏学生徒三名は最終的には東京外国語学校へと移つたが、学籍上は仮学校官費生徒として扱われたようである。また函館に置かれていた露学校生徒三名も一八七四年七月に仮学校官費生徒となり同年十一月に東京外国語学校へ入学した。

札幌学校 一八七五年七月、仮学校は札幌学校と改称し、その管轄は東京出張所より札幌本庁学務局へ移つた。教職員生徒が札幌へ移つたのは八月である。札幌学校の開業式は九月七日に開拓大判官松本十郎ら開拓使官吏列席のもとで行われた。当時の教職員は調所広丈（校長）・森源三（副校長）・井川洌（英学）・平野候次郎（漢学）・高倉平三郎（数学）・田中信邦（事務）・下山依徳（事務・習字）・鈴木行一（漢学・生徒取締）・加藤政敏（校内取締）・山田昌邦（数学）、コルウィン（William R. Corwine）らである。生徒は札幌学校開業時には三五名となっている。

校舎は創成川の西側に位置し（現在の札幌市中央区北一〇条、西一〇二丁目）、一八七三年に御雇外国人の宿舎として建てられたものを修繕したもので、教室・校長教員の控室・書籍室などがあつた。また新築の寄宿舎には一七の寄宿室の他に事務室・講堂・食堂などが設けられていた。札幌学校での授業科目は英学・漢学・数学・習字

の四科目で、科目ごとに一級から三級までにクラスが分けられていた。未だ基礎科目の段階であった。

### 三 様々な仮学校教育と女学校

地質測量生徒・電信生徒 開拓使では、先に見たように時間をかけて開拓技術者養成を図る一方で、当面の緊急課題にこたえるための生徒の教育も行った。地質測量生徒、電信生徒がそれであり、彼らも名目上は仮学校生徒であった。

北海道の地質調査や鉱山の測量は、インドで石油鉱脈の調査経験を持つアメリカ人ライマン(Benjamin S. Lyman)の指導の下で本格的に行われた。一八七三年三月に仮学校生徒から七名が測量補助者として選ばれたのが、「地質測量生徒」のはじまりである。ライマンは補助者たちに測量・分析に関する基礎教育を速成的に行い、さらに彼らを通して半年ほど北海道各地を測量した。翌七四年七月にはさらに仮学校生徒から補助者四名が加わって、ライマンの測量調査を助けた。七六年二月ライマンは内務省に雇い換えとなり、生徒たちも五月に内務省に移っている。

一方、北海道の交通通信網の整備も急務であった。本来、電信架設事業は工部省の管轄であったが、一八七二年六月、函館から札幌までの電信線の架設を開拓使の定額金で行うことに決定した。そのため開拓使は電信係を設け、測量および架設工事に着手すると同時に、工部省に依頼して電信技術者の養成を図ったのが「電信生徒」のはじまりである。北海道の電線架設工事が七四年十月に終了したのをつけて、生徒たちは続々と北海道に赴き、初期の北海道の電信事業の担い手となった。

アイヌ教育 開拓使では北海道よりアイヌを上京させ、仮学校で開拓使官園で教育を施そうとした。一八七二年四月頃、黒田次官は札幌の岩村通俊判官にアイヌ約一〇〇名を上京させるよう命じた。岩村は五月に男子二〇名、女子七名を、さらに七月に男子六名、女子二名を送り出したが、募集は順調に進まなかった。上京したアイヌの年齢

は、最高三八歳、最低一三歳である。彼らは芝山の清光院に居住し、年少者は仮学校で読書・習字等を習い、他の者は渋谷・青山の開拓使官園で樹芸・牧畜などの農業現術を習った。アイヌの上京に合わせて「北海道土人教育掛」や「土人取締」が置かれ、彼らの教育・管理に当たった。

このような開拓使の施策は、風俗・習慣を異にするアイヌの同化を目論んだものであったが、それはアイヌの要望でもなく、またその方法も東京への移住という、それまでの彼らの生活を無視した、多分に押しつけ的なものであったから、結局失敗に終わらざるを得なかった。

ほぼ二年後の一八七四年四月頃までに、病気のため二名が帰道、三名が死亡、また一名が出奔し捕らえられて北海道へ送還されている。同年七月、帰道の要望が強いため二〇名に帰道させ、五名には三〇日間の一時帰省を許した。しかし帰省した五名は開拓使からの度重なる上京督促にもかかわらず、種々の理由を申し立て、再度上京することはなかった。東京に残ったアイヌは、山本惣五郎ら四名に加え、開拓判官榎本武揚の陪従として上京しその後仮学校に移った宇生文吉の五名になっていた。彼らは七四年九月から仮学校生徒とともに学ぶようになったが、七五年に学校が札幌に移転した後、随時退学し、同年中に学校からアイヌ生徒は姿を消した。一人山本のみは七六年にアイヌとして初めて開拓使官吏に採用されているが、他の者たちのその後は詳らかではない。

仮学校 仮学校内に女学校が設けられたのは一八七二年九月十九日のことである。官立の女学校としては同年二月に南校構内に設置された女学校（後の東京女学校）に次いで、日本では二番目のものである。この学校の設置目的は、女子留学生派遣と同様、人材養成のための賢母の育成にあった。教師として二人のオランダ人女性デロイトル（I. de Ruyter）とツワータール（I. Towater）が雇い入れられ、後にイギリス人女性デニス（Elizabeth Dennis）に代わった。また他に和漢学や裁縫の教授を担当する邦人教師若干名と事務掛・女生徒取締などの職員がいた。

生徒の定員は五〇名で東京と北海道で募集された。開校時には東京出身の十数名だけだったが、一八七四年十月



頃までには五〇名前後の生徒を擁していた。彼女たちの入学時の年齢は九〜一六歳で、荒井郁之助の娘の常、大鳥圭介の娘の品・雪姉妹、調所広丈の娘の岩など開拓使官吏の子女が多かったが（入学の確認できる五五名のうち二八名が開拓使官吏の縁故者）、後に森有礼夫人となった広瀬常などもいた。全員が一月一〇円の給付を受ける官費生徒で、成業後は、はじめ北海道に永住することになっていたが、七三年四月に定められた「入校証書」により五年間開拓使に従事すること、北海道に在籍する者と結婚すること、校則違反などにより退学を命ぜられた場合には在学中の学費を弁済することなどが義務づけられた。教授された科目は和漢学・英学・歴史・地理・算術・裁縫などで、テキストには和漢籍のみならず英籍も使用されている。

一八七四年秋、腸チフスが流行し女学校は一時閉鎖されたが、こうした最中に女学校を札幌に移すことが決定された。その背景は不明であるが、この決定は生徒たちと教職員に動揺を与え、退学者、辞職者が続出した。結局、札幌移転は翌年に延期され、また「入校証書」中の北海道在籍者との結婚を義務づけた項目も削られた。

札幌への移転が行われたのは一八七五年八月である。旧本陣（現在の札幌市中央区南一条西三丁目）を修理して校舎とし、同月二十四日に開業式が行われた。この時の生徒数は三五名である。ところが、わずか八カ月後の七六年五月初め、「女学校ノ紛擾」のために廃校となった。生徒は官費生徒を免ぜられ、それぞれの親元に帰った。幾人かを除いて、彼女たちのその後についてはほとんど知られていない。

#### 四 仮学校の日常生活と主な出来事

仮学校・札幌学校生徒は全員寄宿舎で起居していた。衣類は官給で、洋装である。初めは和食であったが、札幌移転に備えて、一八七五年三月から洋食が採り入れられた。七二年七月に定められた日課表によって生徒の一日の生活を示すと、夏期（三丁八月）は六時に起床、洗面・道遥・食事をした後、八時から授業、一二時から昼食・休

憩時間が一時間あり、午後一時から四時まで授業（水曜の午後は休業）、四時から五時まで運動、夕食後六時半から八時半まで復習時間で九時に就寝、九時半消燈となっている。冬期は起床及び授業時間開始が一時間遅くなる他は夏期と同様である。外出は認められていたが、鑑札の受け渡しにより生徒の出入りの取り締まりが行われた。門限は夏期七時、冬期六時であった。日曜日には散歩料として二五銭の小遣銭が生徒に与えられ、ときおり教職員に引率され、上野などへ市中見物に出かけたりもした。また教師ベーン（Albert G. Bates）の指導によつて余暇には野球に興じたともいう。年二回の試験によつて生徒の等級が定められた。七三年末の試験後には、生徒に褒賞として時計・蝙蝠傘・英和辞書などが与えられている。七二年七月には生徒自習中の音読を禁ずる達が出されたが、この達をめぐつて生徒と学校が対立し、江木千之ら十数名が退学を命ぜられた。

一八七三年五月、皇太后及び皇后の開拓使青山官園への行啓があり、七月には同所への天皇の行幸、十二月には皇后の仮学校への行啓があつた。いずれの場合も生徒たちは英語・作文など勉学の成果を披露している。

一八七四年秋には腸チフスが流行し、医師の勧告により学校を一時閉鎖したが、生徒三名が死亡している。

## 第二節 札幌農学校の創設

### 一 専門科の開設準備と専門教師の招聘

仮学校札幌移転以前の「一八七四年十二月四日、農学専門科設置が決定した。仮学校設置当時の開拓使仮学校規則では、工業・鉱山・土木工学・農学をそれぞれ主内容とする専門四科を設置するとなつていたが、開拓使における技術者養成の重点が農学關係に置かれることになつたのである。これは、すべての専門科設置のために教師を揃えるのは困難であるから、まず「農学専門」を先行させて「開拓之御用弁」を果たし、さらに生徒の「進歩」を待つ

て鉱工業の専門科を設置すべきであるとのケブロン<sup>(Keburon)</sup>の意見を探ったものである。また、食料自給に鑑み、農業ヲ盛ニスルヲ第一ノ急務ト思ヘリ、故ニ先ツ農学校ヲ興シ其方法ヲ拡充セン」とした黒田の意向とも合致していた。

森源三らが学校の具体的内容を詰める一方、黒田は、雇用する専門教師の人選を在米全権公使吉田清成に依頼した。依頼を受けた吉田の奔走により、マサチューセッツ農科大学 (Massachusetts Agricultural College) の学長ウィリアム・スミス・クラーク (William Smith Clark) が招聘に応じた。但し、クラークは現職の学長であり長期不在は許されなかつたため、開拓使の求めた契約期間は二年であつたが一年となつた (一八七六年三月三日、雇い入れに関する契約が結ばれた)。さらに、クラークの推薦により、ウィリアム・ホイラー (William Wheeler)、ダビッド・P・ペンハロー (David Pearce Penhallow) の二名がさらに雇い入れられた。彼ら三人は同年五月にアメリカを發つて六月二十九日に横浜へ上陸し、しばらく東京に滞在した後、七月三十一日に札幌へ到着した。教頭に選ばれたクラークはアメリカのアマースト大学 (Amherst College) を卒業、その後ドイツのゲッティンゲン大学 (Georgia Augusta Universität Göttingen) に学んでドクトル・オブ・フィロソフィー (Doctor of Philosophy) の学位を得、帰国後は南北戦争に従軍し、またマサチューセッツ農科大学の創立 (一八六七年) にも関与した。ホイラー、ペンハローはマサチューセッツ農科大学を卒業し、パチエラー・オブ・サイエンス (Bachelor of Science) の学位を得た人物で、共にクラークの教え子であり、まだ二〇代の青年であつた。

## 二 第一期入学生と農学校の開校

一方、専門科開学を控えて札幌学校では一八七六年の夏期休暇返上で生徒の学力向上を図るとともに、東京で新たに生徒を募集した。文部省の管轄下にあつた東京英語学校 (東京大学予備門の前身) と東京開成学校 (東京大学の前身) の生徒たちに募集がかけられ、七月に在京中のクラークらにより口頭試問形式の試験が行われた。受験し

た一五名全員が合格し、うち一一名が入学した（佐藤昌介、渡瀬寅次郎、柳本通義、田内捨六、黒岩四方之進、内田澗、山田義容、大島正健、中島信之、出田晴太郎、玉置恭三郎、このうち黒岩は開成学校、他は英語学校の出身）。札幌学校生徒に対する入学試験はクラークらの着札後に行われた。当時生徒は二十数名いたとされるが（他に通学生徒が十数名いた）、試験合格者は二三名（荒川重秀、藤田美秀、兵頭虎雄、伊藤一隆、上村行孝、内藤吉金、小野兼基、小野琢磨、佐藤勇、島津勇治、高林吉太郎、安田長秋、横山彦次郎）で、東京からの者と合わせて二四名が札幌農学校第一期入学生となった。落第した札幌学校生徒たちは規則により農業現術生徒となったが、そのほとんどは身体虚弱などを理由として間もなく札幌を去っている。また、第一期生二四名中五名（藤田、内藤、島津、高林、兵頭）は九月に学力不足のため退学し、十一月に一名（横山）が病気のため離札し（翌年五月頃退学）、さらに翌年二月には二名（上村、玉置）が第一期末試験落第のため退学させられ、無事に第一学年の課程を修了したものは一六名であった。

一八七六年八月十四日午前一〇時より札幌学校第一講堂において、長官以下開拓使の諸官員、外国人教師、生徒、各郡教育所員ら百余名列席のもとに専門科の開校式が行われた。式の中でクラークは「少年ノ諸君ヨ、君等ノ本国八目今大二君等ノ至誠至強ナル従事ヲ要スルニ非スヤ、君等各宜ク自国ニ於テ勤勞ト信任及之ヨリ生ル栄光ノ最上地位ニ適センコトヲ勉メヨ、健康ヲ保シ、情慾ヲ制シ、従順ト勉強ノ習慣ヲ育ヒ、時期ノ学フヘキニ遇ハ、學術ノ何タルヲ論セス、カラノ及ン限リハ其智識ト妙巧ヲ求メヨ、如此ニシテ而シテ後チ君等ハ能ク重要ノ地位ニ適スト云ヘシ」と、生徒たちに訓示を与えた。

内務省によつて設置された駒場農学校の開業が一八七八年一月、工部省による工部大学校の開業が同年四月、また東京開成学校と東京医学校が合併して東京大学となったのがその前年、七十七年四月である。札幌農学校は、単に農業教育機関としてばかりでなく日本における高等教育機関としても、最初期に設置された学校の一つであった。

## 第三節 札幌農学校の制度と施設

### 一 札幌農学校諸規則と教職員

授業は一八七六年八月十七日から開始されたが、農学校に関する規則類が定められたのは同月末から翌月にかけてであった。八月三十日にまず「札幌農学校規」が、九月には「札幌農学校諸規則」「職制」「舎則」、それに生徒の日課などが相次いで決められた。九月八日には「札幌農学校」と改称することが決定され、翌日から施行された。ちなみに外国人教師たちは着任当初よりこの学校を「Sapporo Agricultural College」と表現しており、校名改称以前に「札幌農学校規」が制定されたのもクラークが提出した英文を直訳したためである。

規則類のうち、生徒の入退学や教育内容など最も基本的な事柄を定めたのが「札幌農学校諸規則」である。これは調所校長と協議した上でクラークが原案を作成し、調所が若干の修正を加えた後、九月八日黒田長官に認可された。第一章「札幌農学校之目的及ヒ大旨」、第二章「入学約条」、第三章「生徒ノ等級試験并退校」、第四章「一般ノ規則」からなり、その主な点を要約すると次のようになる。札幌農学校は開拓使官吏養成を目的として設置されたもので、生徒は卒業後五年間開拓使に従事しなければならない（第一章第一節）。生徒の修業年限は四年間で成業者には「大学及第ノ免状」（クラークの原英文では“Bachelor of Science”）を与える（第二章第二節）。主要科目は次の通り。和英国語、能弁学、作文、図学、記簿法并理事書法、代数学、幾何学、三角学、測量学、土工学、理学、星学、化学、本草学、獣学、地質学、人体并比較解剖学及ヒ生理学、心学并人倫学、経済学、農学并園芸（第一章第三節）。学期は二期に分け、第一期は八月第四水曜日より十二月第四水曜日まで、第二期は一月第四水曜日から七月第一水曜日までとする（第一章第四節）。入学試験は和英国語・算術・地理書・歴史を課し、入学資格は一六歳以上で「体質健康行状端正ナル者」とする（第二章第一節）。学力不足や不行状、あるいは自

己の都合により退学する際は在学中の入費を償還すること、但し、死去や病気または官の都合による退学の場合はそれには及ばない（第三章第二節）。生徒は毎日少なくとも四時間課業の予習復習をしなければならない（第四章第二節）、などである。後に主要科目中に「体操」と「兵学及比戦法」が加えられている。

生徒は原則として官費生で、その定員は一年生から四年生まで合わせて五〇人である。官費生には生活・学業に必要な一切が給与されたが、卒業生は五年間の開拓使勤務の他、北海道への編籍が義務づけられた。私費生も認められており、生活費・学費として毎月一〇円を納めるとされたが、開拓使への奉職などの義務はなかった。

一方、札幌農学校教職員は「職制」により校長・教授・書器専掌・理事の四種とされた。校長は引き続き調所広文が務め、専門科開学以前の八月三日に「札幌学校校長」として発令されている。教授は生徒の教育の他、生徒に関する諸事務や宿直などを担当し、書器専掌（教授が兼務）は書籍や物理化学器具の管理を、理事は会計・出納・公文往復などを職務とした。ところで、教授以下の職員を任命した辞令は当時の開拓使の記録に見あたらない。ただ実際には、札幌学校当時から教師であった井川洌・平野候次郎・長尾布山・山田昌邦に加え、クラークの通訳を務めるなどした堀誠太郎の五名が、外国人教師と共に生徒の教育に当たっていた。彼らはいずれも八月二十三日に「学務局督学課申付候、但、札幌学校掛」との辞令を受けている。彼らが職制中の教授に該当するのである。同様に、同日「学務局理事課申付候、但、理事掛」とされた森源三・田中信邦・加藤政敏・下山依徳の四名が同じく理事に当たると考えられる。彼らも札幌学校以来の職員である。なお、辞令からも分かるように、当時の農学校邦人職員はその管轄機関である開拓使の官吏であり、農学校固有の職員はまだない。

開校当時の外国人教師は、クラーク、ホイラー、ペンハロー、および札幌学校当時からコルウィンの四名である。彼ら外国人教師は職制に規定されず、彼らが個別に開拓使と結んだ契約のみがその職務を規定したと考えられる。クラークは単なる教師ではなく、「教頭」（英文の契約書には“President”とある）であった。彼には、校長の

顧問として、課程の編成その他農学校創立に関する一切が委任されていたと考えられている。事実、農学校の基本的枠組はクラークによって形成された。農学校の年次報告書とも言うべき『札幌農學年報』も教頭によって編纂されていた。

この後一八七七年二月にマサチューセッツ農科大学出身のウィリアム・P・ブルックス (William Penn Brooks) が、翌年七月には同じくマサチューセッツ農科大学出身で、さらにハーバード大学 (Harvard University) 医学部を卒業したジョン・C・カッター (John Clarence Cutter) が雇い入れられた。

## 二 施設の拡充

制度の整備と並行して施設の拡充も図られ、一八七八年頃までに主要な建物はほぼ整備された。札幌学校以来の校舎はマサチューセッツ農科大学の "North College" に擬して「北講堂」と呼ばれるようになり、一八七七年に補修が行われた(八八年に焼失したが翌年「新北講堂」が再建された)。寄宿舎は七八年に生徒の増加に伴い増築されている。さらに書庫(七六年十二月建設、九〇年増築)、化学講堂(七七年八月落成)、兵学などの教場として演武場(七八年十月落成、現在の札幌時計台)、天文観測のための観象台(七九年五月建設)などが設けられた。授業の中で使用する化学・物理学・獣医学などの実験器具や農場実習用具、教科書や参考書なども次々にアメリカから取り寄せられた。

植物園や農園の設置の必要性は当初からクラークによって指摘されていた。一八七七年十二月には構内地一万二一八〇坪を「養樹園」とし北海道産の樹木栽培を行った。翌年二月には農学校北側に隣接する開拓使民事局勸業課の温室とその属地三六〇〇坪を譲渡され、養樹園と合わせて植物園造りが進められた。八四年に農商務省北海道事業管理局所轄札幌農務事務所が管轄していた博物場とその属地一万三八〇〇坪余が農学校に移管され、植物園は改

めてこの地に設置されることになる（現在の植物園）。一方、農園は開校後間もない一八七六年九月にその設置が許可された。開拓使ではケプロンの献策などにより東京・七重（函館近傍）・札幌などに「官園」を設け外国植物の移植や動物の試養、また農業現術生徒を置いて洋式農法の実地伝習などを行っていたが、札幌官園のうち三〇万四五〇〇坪を農学校に移管した。移管された官園は「校園」または「農校園」と称された。いずれも“College farm”の訳語である（八四年十二月に正式名称が「札幌農学校所属農園」と確定する）。七七年十月には園内に日本初の洋風畜舎でホイラーの設計による模範家畜房（モデルバーン）が完成している（一九六九年に重要文化財の指定を受け、現存している）。

校園では、校園監督としてクラーク（後任はブルックス）がその経営にあたった。諸種の農機具が毎年のようにアメリカから輸入され、穀類や蔬菜類の他、飼料作物の生産が行われた。また、牛馬類の輸入や繁殖にも力が入られ、乳製品の生産も進められた。一般農家への優良な種子の分配、農家所有の牛とアメリカより購入した牛との無料交配など、校園経営は北海道農業の改良という目標に対して極めて実践的に行われた。一方、未開地の開墾も重要な作業であり、湿地の土壤改良など良耕地の拡大が図られた。

開墾や農作業など校園での現業に従事したのは、「雇」として月給数円から十数円で雇い入れられた人々で、およそ一〇名前後いた。彼らのうちには以前開拓使農業現術生徒として欧米農法の伝習を受け、後に農学校の技手や助教授となった人々もいた。彼らを指導したのは校園監督の指導を受けた「校園掛」（職制にはない）らであった。

### 三 予科の設置と二期以降の生徒募集

農学校の制度・教員・施設は以上のようにして整備されていったわけであるが、ではそこで学ぶべき生徒たちはどのようにして集められていたのだろうか。



農学校には本科(専門科)入学の予備教育機関として予科が併置されていた(当時は預科・予科・予課・予習科・予備科などと様々に表されている。いずれ「Preparatory Class, Preparatory Department, Preparatory School」などの翻訳であるが訳語は一定していない。当時はいくつかの名称を混用していたと思われる)。教頭がその管理に当たり、修学年限は三年で、一二歳以上、ある程度の国語力を有する事が入学資格とされている。書籍筆墨類は貸与または給与され、授業料は徴収されていなかった。しかし、一八七八年からは「書籍借料及び謝儀」として毎月五〇銭が徴収され、またアルファベットやアラビア数字の読み書き、簡単な綴りの理解が入学資格に付け加えられている。最初に予科生徒となったのは、札幌学校時代に予備級生徒・通学生徒と呼ばれていた十数名であった。当初生徒は特に募集せず、志願者を随時学力相応のクラスに編入していたが、七九年頃より下等小学校卒業程度の者を対象に生徒募集を行うようになった。八一年七月までに予科への入学が確認できる者七九名についてその出身地を見ると、開拓使(北海道)が三一名で全体のほぼ四割、静岡・東京・青森・鹿児島がそれぞれ一割前後であり、他の府県はいずれも一、二名となっている。

教授科目は和漢学・英語・算術・代数・幾何・地理・歴史といった普通学であった。駒場農学校の予科では普通学その他、物理学大意・人身及比較解剖及生理・普通化学初歩が、工部大学校予科では機械学初歩・理学初歩・化学・図学など、それぞれの専門に応じた基礎的科目が含まれていたことと比較すれば、札幌農学校の予科の教育内容は一般的な中等教育機関と大差ないものであった。予科の授業は邦人教師・外国人教師がともに行っていたが、本科の増加に伴い一八七八年八月以降、ほとんどの科目を邦人教師が担当するようになった。

生徒の異動は激しく、先の七九名のうち中途退学者はほぼ半数の三九名に及んでいる。落第者も多い。開校から一八八一年までの五年間に予科の課程を修了し本科に進学したものはわずか一二名である。つまり、予科は本科の予備教育機関としては不十分であった。そのため八一年からは修学年限を四年に延長し、また科目中に農業現術と

体操が付け加えられた。それにもかかわらず、八五年までの予科から本科への進学者は毎年数名で、本科生徒の過半は他学校の出身者であった。

開校の翌年一八七七年の本科第二期生は主に東京大学予備門及び工部大学校予科から募集に応じた者たちであった。予備門を管轄する文部省は東京大学に進学すべき生徒の割讓に消極的であったが、結果的には同校より一名（毛受駒次郎、高木玉太郎、藤田九三郎、佐久間信恭、太田「新渡戸」稲造、宮部金吾、岩崎行親、内村鑑三、永井於菟彦、足立元太郎、伊藤英太郎）、工部大学校予科からは五名（諏訪鹿三、南鷹次郎、伊藤鑑太郎、広井勇、町村金弥）が入学した。この時入学した宮部金吾は後年、クラークの通訳を務めていた堀誠太郎が予備門にやってきて、北海道の魅力を強調し、無試験で入学させるから来たれ、と勧誘の熱弁を振るつたことを回想している（宮部金吾「思ひ出のまゝ」、『文武会々報』第五五号）。さらに長崎英語学校から二名（西村規矩、村岡久米一）が入学し、その他に九月に一名（川口宗時）、十月に一名（奥田直張）が私費生徒として入学している。

一八七八年には初めて予科から四名（中根明、堀宗一、小島喜作、調所恒徳）の本科入学者を出し、これに加え他学校から募集した一四名（小林秀太郎、梅野四男吉、斎藤祥三郎、高岡直吉、高木資斌、伊吹鎗造、原田成貞、杉山清利、久島重義、赤壁二郎、尾泉良太郎、大津和多理、武藤亥三郎、隈元宗正）を合わせた一八名が入学した。なお前年は宮部の回想にあるように無試験であったが、この年からは入学試験が行われている。この年で本科生徒は定員の五〇名にほぼ達したため翌七九年の生徒募集は行われなかった。

一八八〇年には定員の枠がなくなり、官費生制度に代わって貸費生の制度が設けられた。すなわち学費・生活費などとして一カ月九円（八一年四月からは一二円）を生徒に貸与し、卒業後月賦返還させるというものである。貸費生には卒業後の開拓使奉職や北海道への編籍といった義務は課されていない。生徒募集も八〇年からは公募が原則となり当時の新聞に広告を出した。入学資格は年齢一六歳以上で、身体壮健ニシテ種痘或八天然痘ノ済ミタルモ

ノ、試験科目は英語・地理書・万国史・算学・漢学の五科目で、試験は札幌と東京で行われた。応募者が全体でどれほどいたか不明だが、東京では二十数名が応募し、そのうち一名（渡瀬庄三郎、岡文二郎、細川文五郎、武信由太郎、福原鉄之助、河村九淵、手島十郎、中川太郎、本土源次郎、菊地熊太郎、黒宮武雄）が合格した。札幌では九名（早川鉄彌、頭本元貞、三増桑吉、毛利鶴次郎、中根寿、佐瀬辰三郎、志賀重昂、山下敬太郎、結城祥吾）が合格し、計二〇名が入学している。

一八八一年までの本科入学者二〇二名を対象としてその傾向を見れば、入学時の年齢は一六―一八歳の者が大半を占め、六二名にのぼる（最高二二歳、最低一五歳、不明二二名）。身分は士族七二名、平民一九名、華族一名である（不明一〇名）。出身地は東京が最多で一六名、次いで静岡九名、北海道八名、山口・高知各五名、宮城・新潟・島根・鹿児島各四名となっている（その他三九名、不明四名）。また出身校は東京英語学校、東京大学予備門が四一名で最も多い。これに次ぐのが札幌学校、札幌農学校予科の二五名、工部大学校予科五名、大阪英語学校・愛知県中学校各三名で、他に官公立の学校や慶応義塾などの私立校から十余名が入学している（不明一三名）。

彼らをして農学校へと入学させた動機は何であったのか。『創基五十年記念北海道帝国大学沿革史』には、東京英語学校より札幌農学校に移った生徒について、「此等応募生は……北方開拓の雄図止み難く（東京英語学校の）校長を始め諸教官の諫止に耳を仮さず、断然校を退いて渡道す」とある。一期生大島正健は農学校入学志願者を「物好きな学生」と呼び、二期生南鷹次郎は「夫れに北海道と云ふから面白い」と自らの入学の動機を語っているように、開拓も緒に付いたばかりの北海道には、当時の血気盛んな青年たちを惹きつける魅力があったことも確かであろう。また同時に官費生・貸費生といった学資を給貸与する制度も、苦学生には重要であった。工部大学校の生徒となれなかつた南や同じく二期生の町村金弥は、農学校官費生徒募集を「吉報」として受け取り直ちに応募したのである。

## 第四節 札幌農学校の教育と生活

### 一 農学校の授業

農学校のカリキュラムは教頭クラークによって編成された。開拓使では専門科設置構想の段階で、マサチューセッツ農科大学に留学経験を持つ湯地定基や堀誠太郎の手により同校をモデルとした独自のカリキュラム案を作成していた。クラークもまた同校の現職学長であり、農学校のカリキュラムは同校と酷似したものとなった。その結果、札幌農学校の教科目は、当時の日本の高等教育機関、とりわけ自然科学を専門とした駒場農学校や工部大学校と比較しても、英語の比重が大きく、またその中に弁論・討論関係の科目が含まれるなど人文社会科学系科目が少なく、さらに兵学教育も採用されるなど、きわめて特異であった。これはマサチューセッツ農科大学の理念、すなわち農業教育のみならず、知育・徳育・体育といった全人的教育を施すという理念に基づいていた。しかしながら農学校の授業がカリキュラム通りに行われたわけではなく、しかも毎年のように変更があったため、入学年度の違により生徒たちが履修した科目および時間数は同一ではなかった。

外国人教師による講義は全て英語で行われた。生徒は教師の口述を筆記し、寄宿舎に帰った後にそれをノートに浄書し、さらにそのノートを教師が点検して誤りを修正するという形で授業は進められた。教師の口述を生徒が筆記するという講義は当時一般的な方法であった（第二次世界大戦後もしばらくは続いていた）。一部の科目では原書を教科書・参考書としていた。寒冷の北海道は道南地方を除いて稲作に適さないとされ、当初農学講義の中では稲作については全く触れられなかったが、一八八五年に助教南鷹次郎によって稲作を主要内容とする「日本農学」が開講されている。それは北海道外に就職した卒業生が、アメリカ式農法だけを学んで稲作について学ばなければ駒場農学校出身者に圧倒されてしまう、と訴えた結果であったようである。

試験は各期末に行われ、その結果は『札幌農養年報』に公表された。年度末試験の際は各科目の成績優等者二名に賞金が与えられた。一八七七年は一等八円、二等四円であったが、対象者の増加のため翌七八年は一等七円、二等三円五〇銭となり、七九年からは五円と二円五〇銭となっている（一人が貰える上限は二〇円）。八〇年の三年生の試験では内村鑑三が五科目中四科目で一等となり賞金二〇円を獲得した。一方試験の結果、学力不足とされた者には退学が命ぜられ、七七年二月に二名、同年十二月に二名、八一年一月に四名が農学校を去っている。

校園での農業実習は当然学業の重要な一環となっていた。実習時間は週に二回各三時間が普通である。実習内容は開墾や排水溝の掘削などの肉体労働、播種や刈取などの農作業、農園管理法の伝習、あるいは生徒に一定の試作地を与えて試験栽培を行わせるなど多岐にわたっていた。実習時間一時間につき五銭の割で、生徒に賃金が支払われた。これもマサチューセッツ農科大学に倣ったものであり、生徒に勤労の習慣を養わせ、労働とその対価としての報酬の意味を体得させようという、きわめて教育的意図に発するものだった。生徒たちにとっては貴重な小遣源であり、当初あった金銭を賤視する「土族風の気象」も払拭されるに至ったという（常瑤居士「忘れぬ草」『蕙林』第一二号）。

先に述べたように、カリキュラムの中には兵学も含まれており、これもまたマサチューセッツ農科大学に倣ったものであったが、しばらくは実施されていなかった。二代目教頭ホイラーはその早期開講を求め、ウエスト・ポイント（West Point、アメリカの陸軍士官学校）出身者の招聘も要望したが実現しなかった。実際には演武場落成後の一八七八年十二月から兵学教育が実施された。教師は陸軍士官学校出身の少尉加藤重任で、フランス式日本陸軍の制式に則ったものであった。その内容は歩兵操練を中心として、射的・宿営などの実技および講義があり、原則として各学年週二時間行われた。後には屯田事務局から大砲を借りて砲兵術の訓練もなされ、市街の武装行進や実弾射撃訓練も時に行われた。

このような兵学教育の目的は、生徒の健康増進と有事の際に土官となりうる人材養成にあった。しかしその効果はあがらず、一八八〇年からは、運動不足のため生徒の欠席者が多いことに対処して兵学の時間内に体操も行われるようになった。加藤に代わって八四年から兵学を担当した退職陸軍大尉高田信清は、生徒は「運動寛慢」、「身体軟弱」でわずかな訓練時間でも疲労激しく休憩を欲しがる者までおり、訓練を重ねてもその成果が見えない、と生徒たちの「文学生徒」ぶりを嘆いている。

一八八四、八五年の卒業生には「歩兵操練科卒業証」が授与された。これは八三年改正の徴兵令中に「官公立学校……ノ歩兵操練科卒業証書ヲ所持スル者ハ」服役期間を短縮するとの規程があつたために急遽採られた措置であつた。

我が国の学校で兵式体操が一般的となるのは、文部大臣森有礼が高等師範学校にそれを行うよう訓令した一八八六年五月以降のことであるから、農学校における兵学教育導入はそれより七年半ほど早かつたわけである。森は農学校の兵学教育について「実二本邦学校ニ武技ヲ加フルノ嚆矢ト言フベシ」と評価している。

## 二 課外活動

学校での教育活動は授業のみにとどまるわけではない。開校から三カ月後の一八七六年十一月、当時の本科生全員が参加して開識社が結成された。クラブがその創立を後援したとも言われる。社則を定め、社長・副社長・書記といった役員を置き、会は毎週土曜日午後七時から開催することを原則とした。そこでの討論などの題目は生徒たちの関心を反映して、宗教や北海道開拓に関連するものが当初多かつたが、後には政論的なものも取り上げられている。八一年には志賀重昂らにより、ほぼ同様の目的・組織を持つ尚友社が結成された。また卒業生や教師なども会員となって農学関係について討論する北海農話会・農学協会といった学会的なものも結成されている。その他、

旭桜社・北振社・尋盟社といった団体や、大学予備門出身者らによる修交社という組織があったようであるが、それらの詳細は不明である。

農学校ではペンハローの提案により、北海道農家の啓蒙を主目的として『札幌農学校報告書』と題する小冊子を一八七八年から毎月一回発行した。これには生徒たちの学業成果や外国新聞などの抄訳が掲載され、八〇年からは『農業叢談』と改題して一部三銭で発売された。しかし同じような性格の雑誌が開拓使などから発行されるようになったため、八一年第一八号で廃刊した。

一八七八年六月一日、外国人教師たちの提案で遊戯会（運動会）が行われた。競技種目には石投げ、玉投げ、芋拾い競争、幅跳び、目隠し競争などがあり、数百人の見物客が集まった。以後遊戯会は毎年五、六月に市民が注目する中で開かれ、札幌年中行事の一つになった。遊戯会は生徒の健康管理、体育的意義から提案されたもので、兵学教育とも通底するものであった。

クラークが生徒たちと冬の手稲山に行き新種の苔を発見したという逸話は、よく知られている。外国人教師たちは動植物の採集や地質調査などのため生徒を引率して、しばしば野外実習を行っている。夏期休暇中には教師に率いられた生徒たちが長期の実習旅行に出かけることもままあり、一八九〇年代には農学校の年中行事として定着するにいったつた。

### 三 卒業式と卒業生

札幌農学校の第一回卒業式は一八八〇年七月十日に行われた。午後三時、兵学教師加藤重任の指揮による本科生全員の歩兵操練があり、次いで四時から卒業生のうち六名によって卒業演説がなされた。うち渡瀬寅次郎、大島正健、佐藤昌介は日本語、内田瀨、小野兼基、荒川重秀は英語で行い、内容も「戦争ナケレハ勝利ヲ得ルナシ」（大

島の演題) など農業にとどまらない一般的なものも選ばれている。

この日卒業したのは一三名で、彼らに授与された学位証状には「札幌農学校ニ於テ定規ニ遵ヒ其業ヲ卒ヘ考試ヲ経テ科第二登ル、乃チ授クルニ農学士ノ位ヲ以テス、因テ印ヲ鈐シテ永ク其名ヲ証ス」と記されていた。規則には卒業生に「大学及第」の免状を与えることあり、英文ではこれを“Bachelor of Science”と表現していた。農学校は当初「理学士」として発行しようとしたが、最終的には「農学士」となった。当時の東京大学、工部大学校、駒場農学校など中央の高等教育機関では、法学士・文学士・理学士・医学士・工学士・農学士など、学部や専攻に応じた学位を発行しており、札幌農学校の学位もその点が考慮されたのであろう。

卒業生は七月十六日開拓使御用掛(准判任官、月俸三〇円)に採用され、その後開拓使内の各部署に配属された。官費生であった彼らは、懲戒や個人的理由で退職する場合には在学中に要した経費を弁済することが義務づけられていた。その額は仮学校以来の荒川らで二七四〇円、一八七六年の入学者で二四六〇円と巨額に達した。

第二回卒業式は一八八一年七月九日に行われ、一〇名が卒業した。うち六名が卒業演説を行った。足立元太郎、太田稲造、高木玉太郎は英語で、広井勇、宮部金吾、内村鑑三は日本語で行っている。卒業生はやはり全員が開拓使御用掛(待遇は前年に同じ)に採用された。

第三回卒業式は一八八二年七月二十二日に行われ一八名(梅野四男吉・斎藤祥三郎・高岡直吉・原田成貞・小島喜作・大津和多理・赤壁次郎・椋山勝利・久島重義・佐久間信恭・中根明・伊吹鎗造・尾泉良太郎・堀宗一・武藤亥三郎・調所恒徳・鶴崎久米一・諏訪鹿三、うち佐久間・鶴崎・諏訪は七七年の入学)が農学士の学位を得て卒業した。彼らは札幌農学校最後の官費生徒で、やはり開拓使への奉職義務があったが、卒業時すでに開拓使は廃止されていた。そのため学校側では、函館・札幌・根室の三県や農商務省など北海道に関連の深い官公庁に採用を働き掛けたが、なかなか全員に職は得られなかった。こうしたことから、やむなく入学の際の誓約書は破棄され、彼ら



は各地に自由に職を求めることになった。

なお、以前の卒業生も同時に誓約書を破棄せられたらしく、この後職を辞し自由に行動するものが目立つてくる。荒川・佐藤・広井はアメリカへ留学し、内村は津田仙の学農社学校教師となり、高木は東京教育博物館に就職し、一八八二年十一月より母校で教鞭をとっていた太田は東京大学に入学するなどしている。

#### 四 教師陣の交代

一八七七年四月十六日、札幌農学校初代教頭クラークは帰国の途についた。開校から八カ月後のことである。この日、農学校は臨時休校となり、教師・生徒一同はクラークを札幌近郊の島松駅通所付近まで見送った。その去りに際して彼は「小供等よ、此老人の如く大望にあれ」(Boys, be ambitious like this old man.)との一言を残したとされる(安藤幾三郎「ウヰリヤム、クラーク」『蕙林』第一三三号)。この「クラーク伝説」は、一八九〇年代から一九〇〇年代にかけて札幌農学校の存続が危ぶまれ、あるいは農科大学への昇格が問題となつた際に大いに語られ、人口に膾炙した。

クラークの後を継いだ第二任教頭ホイラーは一八七九年十二月、第三任教頭ペンハローは八〇年八月に農学校を離れた。すでにコルウィンは七六年に辞めており、ここに農学校以来の外国人教師は全ていなくなつた。だが、それは「本校は今や創業時代を経過し、正規の事業に対して主なる必要物件は完備するに至れり」(ホイラー)との感慨を得て後のことであつた。なお第四任教頭はブルックスが継いでいる。ホイラー、ペンハローの離札に前後して、マサチューセッツ農科大学・マサチューセッツ工科大学に学んだセル・H・ビーボデイ(Cecil Hobart Peabody)、ロンドン大学キングスカレッジ中国語教授を務め、岩倉使節団の招聘に応じて七三年に来日して東京開成学校・新潟英語学校・大阪英語学校で教鞭をとっていたジェームス・サマーズ(James Summers)が雇い入れら

れた。ピーボディは八一年七月、サマーズは八二年六月に農学校を辞しているが、外国人教師は補充されなかつた。開拓使が、高給を払わねばならない外国人教師を避け、邦人教師の採用を進めたためである。その後農学校に雇い入れられた外国人教師はホーレス・E・ストックブリッジ(Horace Edward Stockbridge)、ミルトン・ヘート(Milton Haight)、アーサー・A・ブリガム(Arthur Amber Brigham)の三人である。ストックブリッジとブリガムはマサチューセッツ農科大学の出身である。つまり、農学校外国人教師一一名中、コルウィン、サマーズ、ヘートを除いた八人がマサチューセッツ農科大学関係者であつた。彼ら外国人教師たちはその知識・技術を単に農学校で生徒たちに教授するのみならず、開拓使が進める北海道開拓に生かすことを期待されていた。クラークは北海道開拓全般にわたる指導・助言を行っている。またホイラーは豊平橋の改築や農学校の建物の設計、北海道内各地の道路建設のための測量などに従事し、ペンハローヤストックブリッジは種々の分析実験を手がけている。その他、ブルックスは農業知識の普及に努め、カッターは札幌病院での診療に携わつた。

さて、邦人教師にも少なからず異動があり、一八八二年十二月に長尾布山が死亡し、開校以来の教師は全員いなくなつた。そして国内外で高等教育を受けた者が教師に採用されるようになった。彼ら邦人教師は兵学担当の加藤を除き、主として予科の教育を受け持っていたが、外国人教師の減少に伴つて次第に本科の授業に関与するようになった。八〇年八月から宮崎道正が化学を、工藤精一が地質学を担当したのがその最初である。なお宮崎と加藤は同年同月、本科の教育上、外国人教師と同格とされている。

## 五 農学校とキリスト教

クラークとともに来札した黒田清隆は、クラークに生徒への徳育をも施すよう申し込んだ。その時クラークは聖書によらねばそれは不可能であると答えたが、まだキリスト教の禁制が解かれたばかりの当時(禁制の高札撤廃は

一八七三年二月二十四日)、官立の学校で公然と聖書の使用することをばかつた黒田は、その使用を認めず、会談はそのままに終わった。聖書の使用が黒田に黙認されたのはそれから一カ月ほど後のことであつた。

聖書による徳育が開始されたのは十一月頃である。この月、クラークは生徒たちに、阿片・煙草・酒や賭事さらに瀆神の言葉を禁じたいわゆる「禁酒禁煙の誓約」への署名を求め、自らもホイラー、ペンハローとともにサインした。クラークの聖書講義は、毎朝授業前に聖書中の重要な個所の説明をし、熱心な祈禱を捧げるといつた形で行われた。生徒たちもまた自分たちの手でバイブルクラスを設け、熱心にキリスト教を学んだ。彼らの中には来札以前に洗礼を受けている者もあり、翌年三月にはクラークの起草した「イエスを信ずる者の契約」に一六人全員が署名するまでに至つた。札幌農学校におけるキリスト教の伝統はこうして生まれ、クラークやその後継の外国人教師たちが去つた後も上級生から下級生に伝えられた。しかし、生徒の大半が入信したのは一八七七年に入学した二期生(官費生一八名中一五名が「契約」に署名)までで、その後、キリスト教をめぐり学校内外で対立も起こっている。

ところで、クラークは最初からキリスト教の伝道を意図していたわけではない。彼が生徒に配つた聖書も、当時アメリカ聖書協会から日本に派遣されていたL・H・ギユリックよりたまたま受け取つていたものである。一方で黒田から徳育問題を出された時、クラークが聖書の使用を申し出たことは、クラークのニューイングランド・ピューリタニズム的背景を抜きにしては考えられない。ともあれ、徳育のための聖書使用は、「文明の宗教」としてのキリスト教の魅力伝えて多くの入信者を出すに至つた。

二期生の一人内村鑑三が回心に際して非常に苦悶した様子はその著書『余は如何にして基督信徒になりし乎』によりうかがうことができる。しかし信徒となつた生徒全てが内村のような苦悶と回心を体験したわけではなく、また生涯その信仰を全うしたわけでもない。一期生・二期生の署名者のうち過半数は後にキリスト教から離れている。

宮部はその最晩年、誓約に署名した二期生の半数が「遂に基督教に対する信仰を起すに至らなかつた」と記している（『宮部金吾教会資料』『札幌独立キリスト教会百年の歩み』下巻）。

なお、信仰を保持し続けた者たちは卒業後、どの教派にも属さないプロテスタントの教会を札幌に樹立した。後の札幌独立キリスト教会である。この教会は多くの市民を会員に加え、現在まで続いている。札幌は横浜・熊本などとともに近代日本におけるキリスト教信仰の源流の一つとされている。

## 六 生徒たちの生活

本科生徒は仮学校・札幌学校当時と同様、原則として全員寄宿舎に起居した。一室には通常二人入居し、その広さは二間半四方（一一・五畳）で室内には机・本棚・寝台・ストーブなどが備えられていた。生徒の生活や学業に必要なものは全て給与または貸与され、散歩料として一月二〇錢ほどの小遣錢も支給された。

はじめ食事は三食とも洋食であったが、財政上の理由から一八八一年末より夕食のみが洋食となり、翌秋からは三食とも和食となった。だが生徒の一人は、洋食とはいえそんな「高尚なるもの」ではなく、パンの量は腹を満たさず、小皿には廉価な鹿肉ばかり、水っぽいスープなどと回想しており、和食への切り換えは歓迎されたのかもしいない（常瑤居士「忘れぬ草」『蕙林』第一一号）。

日課表に定められた生徒の一日は、夏期（四〜九月）は、午前六時起床、六時半朝食、七時半〜八時半復習、八時半〜一二時半授業、一二時半昼食、午後四時〜五時半浴湯、五時半夕食、六時〜一〇時復習、一〇時就寝であった。午後には操練や農業実習が課された日もあった。冬期は起床や朝食の時間が一時間遅くなるが、午前八時半以降の日課は夏期と同じである。課業のない時の外出は自由で、寄宿舎の門限は午後七時であった。仮学校・札幌学校のものともあまり変わらないが復習時間がやや多くなっている。一、二期生の多くはキリスト教を受け入れ、また

クラークら外国人教師の影響もあつて、余り飲酒しなかつたようであるが、そうした風潮はいつまでも続いたわけではない。一八八一年七月九日、第二回卒業式の行われた日の晩は「飲めや歌への大騒動」で翌日は「宿酔頭重し」と当時二年生であつた志賀重昂はその日記に残している（志賀「札幌在学日記」）。

生徒たちの生活が全て良かったわけではない。門限に遅れたり、無断外泊などもしばしばあつた。教師の授業や試験の方法などに不満を抱いた生徒たちによる授業ボイコットも何度か起き、一、二人の退学処分者を出している。札幌農学校最大の不祥事は、一八八〇年二月に本科生の一人が校園の事務所から大金を盗み出し、その金を遊蕩に費消した事件である。この時犯人の生徒は刑事罰を受けて獄に下り、遊蕩に連累した数名の生徒が退学処分となっている。

一八八一年夏には天皇の行幸があつた。八月三十一日校園に、九月一日農学校に臨御したが、その際生徒たちは校園では洋式農具を使用した農業実習を、また講堂では農学・英文学の授業や物理・化学実験等を披露している。

## 第五節 開拓使廃止後の札幌農学校

### 一 開拓使の廃止と農商務省への移管

一八七二年から開始された開拓使一〇カ年計画は八二年一月をもつて終了し、同年二月八日開拓使は廃止された。開拓使が担当していた一般地方行政に関することは、その廃止と同時に設置された函館・札幌・根室の三県に、幌内鉄道・札幌勸業試験場・麦酒醸造所などの諸事業や殖民事務・山林事務などは大蔵・工部・農商務など七省および東京府に引き継がれた。

農商務省は内務省の郵便局・山林局・博物館・勸農局や大蔵省商務局などの業務を継承して一八八一年四月に新

設され、その職制には「官設ノ農工商ノ諸学校」（工部省所管の工部大学校を除く）の管理と「民立農工商ノ諸学校」の監督を行うという項目があった。それに対し、文部省は教育行政の一元化を訴えてその修正を求め、翌八二年に農商務省職制が改正され、その所管する学校は内務省旧所管の農学校（駒場農学校）及び商船学校とされた。三月に一旦、農商務省移管が決定した札幌農学校についても、文部省と農商務省がその帰属を争った。五月に農商務省は左大臣宛上申書を提出した。その中で、札幌農学校はその精神と目的は北海道「開墾ノ基軸」の建設にあり、その存在は「全道開墾ノ基軸模範」であり、かつ北海道各地の試験場と密接な関連を有している、それゆえ農商務省に属することは、「該道開拓ノ得策」であると強調されている。結局文部省の主張は通らず、六月農商務省に対して「札幌農学校ハ其省ニ於テ管理スベシ」との指令が出された。

以上のことは札幌農学校が単なる農業専門教育機関ではなく、北海道開拓に密接な関連を有する「全道開墾ノ基軸模範」の教育機関であることが改めて確認されたことを示している。ちなみに最後の開拓長官となつた西郷従道は当時農商務卿で（長官兼任後一カ月弱で開拓使は廃止となつた）、当時の文部卿福岡孝悌よりも先任の参議であつた。農学校移管の帰趨は西郷が開拓長官になつた時点で決定していたと言えるのかもしいない。

一八八二年七月、札幌農学校の農商務省農務局への移管が実施された。それまでの間は開拓使残務取扱が農学校の管理にあつてた。翌八三年一月、農商務省に北海道事業管理局が新設され、旧開拓使下の諸工場や牧場を引き継ぎ、またいつた工部省に属した炭鉱や鉄道の事業、さらに農学校などを所轄することとなつた。

## 二 職制の変化と教職員

札幌農学校の農商務省への移管に伴い、それまで開拓使官吏であつた農学校の邦人教師たちはそのほとんどが農商務省に籍を移して、引き続き農学校本科および予科の教授を担当した。また移管当時二名いた外国人教師（ブルッ

クス、カッター）も以前と同じ条件で教鞭をとった。

一八八二年九月、太政官達第五六号により「農商務省所轄学校職制」が定められ、農商務省の管轄下にあつた他の諸学校（駒場農学校・東京商船学校など）とともに、校長・幹事・教授・助教の四種の職員が置かれることになつた。校長・教授は委任官、幹事は委任または判任官、助教は判任官とされたが、定員は定められていない。これらは単なる職名ではなくて官名であり、札幌農学校はここに初めて制度上固有の職員を有することとなつた。

校長は一八八一年二月三日に調所広丈から森源三（当時開拓使権少書記官）に代わつていたが、八三年一月四日森が改めて校長に兼任された（森の本官は農商務少書記官）。幹事は「学校ノ庶務ヲ幹理」し、校長不在の際にはその代理たる職責を担うもので、かつて農学校教師であつた井川冽が八二年十二月に任ぜられた。教授および助教の任命は八三年三月から始まり、同年中に教授には豊原百太郎・橘協の二名が、助教には工藤精一・橘協（のち教授）・大島正健・加藤重任・内田澗・南鷹次郎・宮部金吾・山崎益の八名が任ぜられた。彼らの任官当時の年齢は、豊原の三五歳を除けば、他は皆三〇代という若さであつた（不明一名）。助教は主に予科の授業を担当し、本科の授業は教授と二名の外国人教師が行つた。八四年一月化学・地質学を担当していた豊原が急死した。彼の後任教師はなかなか得られなかつたが、八五年五月にマサチューセツツ農科大学出身のストックブリッジを雇い入れている。

### 三 農商務省管轄下の農学校

農商務省移管後の札幌農学校は、その存立の基盤にかかわる大きな問題に直面していた。その第一は応募者の急激な減少である。特に移管直後の一八八二年は応募者四三名、実際の受験者一八名、合格者はわずか三名でやむなく生徒募集を中止している。また八三年は応募者が非常に少なかつたため募集期間を延長し、辛うじて生徒を確保するという状態であつた。そして八四、八五年においても予定した人数の入学者は得られていない。この背景には

開拓使廃止後における札幌農学校の将来への不安があつた。また同じ農商務省所轄の駒場農学校には依然成績優秀者への官費生制度があつたのに対し、札幌農学校には貸与制度しかなく、生徒待遇には差があつた。

第二の問題は卒業生の北海道開拓への貢献が非常に薄れてきたことである。一八八七年段階の卒業生の就職状況を見るならば、八二年の農商務省への移管を境として卒業生の動向に大きな違いがある。八〇、八一年の卒業生は全員開拓使に奉職し、開拓使廃止後は農商務省官吏となり、さらに八六年の北海道庁設置後その職員となつたものが多い。農学校関係者もその内に含まれる。そして北海道内にとどまつたのは、不明と死亡を除く一八名中一三名である。一方、八二年以降では道内には四二名中一一名しかとどまらず、就職が各人の自由であつたとはいへ、その数は非常に少ない。彼らの大半が道外へ向かつた理由としては、北海道内で官吏として就職する道が限られていたこと、開拓諸事業が官業中心に展開され、彼らが必要とする私企業が育つていなかったことなどがあげられる。しかしこうした実情は、「開拓ノ基軸」であるはずの農学校にとって大きな矛盾であり、後に金子堅太郎が農学校不要論を唱えることになる。

このような状況を打開すべく、農学校は一八八四年五月北海道事業管理局に校則改正案を上申した。その中には官費生制度（学資・生活費の給与と引き換えに卒業後に農商務省への奉職義務を負う）の復活も盛り込まれていた。しかしこの改正案は、農商務省には認められたものの太政官によって却下され、実現しなかつた。こうして事態は何ら変わらないまま、間もなく北海道事業管理局は廃止され、札幌農学校は新設された北海道庁の管轄となるのである。